

## 泉鏡花「龍潭譚」論

— 子供の自立と母親像 —

日 高 朱 理

### 序章

泉鏡花の『龍潭譚』（『文芸倶楽部』一八九六年十一月初出）は、その幻想的な作品世界の中に母親の面影を投影したような女の妖怪が登場する。鏡花の作品は『龍潭譚』の後に書かれた『高野聖』などにたびたび亡母憧憬のモチーフが描かれている。『龍潭譚』は発表当時「泉鏡花は其成功の勢に乗じてなるか頃る頗ぶる文を弄べり、自ら大家を思惟せるにや、其氣取文に表はる、今人にして古文を弄ぶを見れば何となく冷笑したくなるものなり<sup>(1)</sup>」と評されたように酷評であったが、『龍潭譚』で描かれたような幻想的な作風は、のちに鏡花独自の作風として確立していく。本稿では、鏡花の作風が観念小説か

ら幻想小説に変化した初期の時代に書かれた作品である『龍潭譚』を扱う。

『龍潭譚』では、始め千里という子供の一人称で物語が語られ、最後に三人称に変わり海軍の少尉候補生となった千里と思われる人物が登場する。子供が幻想世界に迷い込み、その後現実世界に戻っても狐つきとして扱われるなどの受難を受けながら、最後は立派に大人になった姿が描かれていることから、千里が迷い込んだ幻想世界は子供が自立するために必要な世界であったと考えられる。『龍潭譚』で描かれているのは幼い頃に母を亡くし、心に欠けた部分を持つ少年が、神隠しにあうことで、欠けていた部分を満たすものを見つけて自立する物語ではないだろうか。また、子供の自立には母親像が

重要な意味を持つと考えられる。まずそれらの根拠を作品世界と神隠しの民話的背景の両面から探る。次に、『龍潭譚』の中で描かれている母親像がどのような存在で、千里にどのような影響を与えているのかについて、千里が思い描く母親像や作中に登場する女性から考えていきたい。最終的には『龍潭譚』に描かれている母親像や鏡花が描く母親像を考察することで、子供にとって母親はどのような存在なのかを探っていきたい。

## 第一章 神隠しの観点から見た二つの幻想世界

### 第一節 神隠しの概念

『龍潭譚』の中で千里は姉の言う事を聞かずに夕暮れ時に一人で忍んで出かけて迷子になる。このように急に人がいなくなることを一般に「神隠し」と言うことがある。「神隠し」を辞書でひくと、「子供などが急にゆくえ知れずになってしまうことを、神や天狗のしわざとしていう語<sup>(2)</sup>」とある。このことから「神隠し」という語は、ただの失踪事件を指す語ではなく失踪事件に人の解釈が加わった時に使われる語だと考えられる。そのため千里

が迷子になった出来事は、村人から魔の仕業だと認識されていたことと千里自身も夢のような幻想世界に迷い込んだような気になっていることから、村人と千里にとって「神隠し」に該当すると思われる。しかし、村人にとつての神隠しと千里にとつての神隠しとは、それぞれが持っているイメージが違うのではないだろうか。村人は魔の世界から帰ってきた千里を腫れもののように扱っていることから神隠しに悪いイメージを持っている事が窺える。反対に千里は、神隠し中に出逢った背の高き女に母親を重ねている。また姉に存在を認識してもらえなかったことや村に帰ってきた後村人にきつい扱いを受け九つ苜が恋しくなっていることから魔の世界に良いイメージを持っていることが分かる。このことから千里と村人が認識している神隠しとは差異がある。千里が迷子になった出来事は、村人や千里から見ると「神隠し」だが事実を客観的に見て失踪事件として考えるとどうなるのか。まず、千里や村人の感情を抜きにして事実をまとめ失踪したときに何が起こっていたのかを整理してみた。次に、村人が考える神隠しのイメージと千里が経験した神隠しのイメージについて、それぞれ考えたい。

まず千里の失踪事件の情報をまとめてみよう。千里が

出かけて行ったのは、午後でまだ明るい時間であった。たらたら坂を登って町外れの山中に入ろうとして迷子になった。最後に千里を目撃したのは、「危ないぞ〜」と声をかけてきた「山の上の方より一束の薪をかつぎたる漢」である。「眉太く、眼の細きが、向さまに顛巻したる」という風貌から、山小屋などに住む山男であることが窺える。千里に「危ない」と声をかけているのは、千里が向かおうとしている所が危ないという意味や今の時間から向かおうとしていることが危ないという意味、小さい子供が一人で山道を歩いていることが危ないという意味など様々な意味が考えられる。その後毒虫が飛んできて千里はその虫を殺してしまう。眼のふちや頬のあたりがむず痒くなっていることからその時刺されたのである。毒虫に夢中になっているうちに来た方向とは違う坂道を降りてきてしまう。坂を上り下りするも、道には一面に躑躅が咲く同じような道が続き、更に迷ってしまう。途中に、家の近くの境内がある空き地を訪れていることから、比較的近い場所です迷子になっていることが分かる。日が暮れてきた頃この境内で「かたみ」の子供達と隠れ遊びをしていると夜が来てしまう。子供達がいなくなり、「極めて丈高き女」が現れる。ここで女を見

失いまた迷っていると、千里を探しに来た姉に出逢うが、千里だと認識してもらえない。姉に認識してもらえなかった千里はショックで走り出す。毒と疲労の影響があったのか大沼の前で倒れてしまう。その後「極めて丈高き女」に九ツ罅に連れて行かれ、女の家と思われるところで一夜を過ごし、看病される。その後女と老父が船で千里の故郷まで送ってくれる。村に着くと、魔が憑いた者として扱われ、無視されたり笑われたりといった冷たい反応を受ける。人々に取り囲まれて質問攻めにあうが上手く答えられない。叔父夫婦や姉など家族にも冷たい対応を受け、特に叔父からは水をかけられたり憑かれていると決めつけられ柱に縛り付けられる。千里の状態が悪くなるのを見てお祓いをされる。お経の聲が高まるにつれて雷が鳴り土砂降りになる。お経が終わり、姉の献身的な振る舞いもあり千里の心は穏やかになる。その後風雨は一晚続き九ツ罅は翌朝淵になる。

千里の失踪事件としての概要はこの通りであるが、「神隠し」として見るとこれらの物事から別の意味を読みとることができる。まず、村人が認識している神隠しについて考えたい。

## 第二節 村社会から見た神隠し

千里が神隠しにあつたきつかけとして、村で定められていた禁忌を犯したことが関係している。始めに犯した禁忌は、姉に黙って一人で来たことである。この時千里が姉に黙って出かけたために、帯の結めを叩いて姉や母の魂を入れ、魔を退けるおまじないを受けていない。また山の上の方から来た男の「危ないぞ〜」という忠告を受けていることや千里が進む途中に番人がいる小屋があることから、この時から既に千里は村人が危惧する場所、魔の世界に足を踏み入れていると考えられる。毒虫の事を姉が教えてくれたのを一度は思い出して毒虫を殺すのをやめようとするが、最終的には殺してしまう。事実では、虫の毒により顔が腫れたから認識してもらえなかったのかもしれない。しかし村社会的に解釈すると、禁忌を犯したことで魔の世界に入り込んだ千里を認識できなかったのだと考えられる。姉に自分を気付いてもらえなかったことで千里から姉に対する信頼感が損なわれ、心の溝が出来たことで千里は魔の世界に入り込んでいったのだ。またその後友となることを禁止されていた「かたる」という風俗が異なる者と遊ぶ。「かたる」とは辞

書によると

①道のかたわらなどにおいて、また、家々を回つて食物、金銭などを人に乞う者。こじき。おもらい。かた。い。

②人をののしつて言う語。ばか。ばかもの。また、皮肉に自身を卑下するのに用いる。かた。い。<sup>(3)</sup>

とある。風俗が異なる者を差別して、村社会に悪い影響を受けないようにするための決まりであろうか。「かたる」は大抵裸足であり、千里が山に上がっている途中に現れる「菅笠冠りたる婦人」も裸足であることから、「かたる」は村人から見ても魔に近い存在なのかもしれない。

さらに「人顔のさだかならぬ時、暗き隅に行くべからず、たそがれの片隅には、怪しきもの居て人を惑はす」という姉の教えに背いてしまう。千里が「かたる」と「かくれあそび」をしていたのは夕方である。小松和彦は、夕暮れ時に隠れ遊びをすることについて次のように述べている。

夕暮れどきに隠れ遊びをするということは、一種の模倣呪術的行為であり、それを禁止するのは、そうした鬼などの隠し神が隠れ遊びをしている子供たち

を発見し、夕闇にまぎれて、遊びとして隠れた子供を連れ去ってしまうからなのだ。<sup>(4)</sup>

これに基づいて考えると「たそがれ時」にさらに「かくれあそび」をしたことで「極めて背高き女」に出逢い、神隠しにあったと考えられる。また千里のいる村では神隠しが信じられていたために「人顔のさだかならぬ時、暗き隅に行くべからず」という決まりがあったのだろう。「たそがれの片隅には、怪しきもの居て人を惑はす」と教えた姉から見ると、「極めて背高き女」は「怪しきもの」で避けるべき存在である。

前述したように、千里は姉から教わった決まりを破ることで魔に接近している。姉が教えていたことは村の決まり事で、村人は決まり事を守ることで魔の者から村を守ったり、秩序を整えていたのだ。そのため、神隠しや千里が迷い込んだ幻想世界は村人にとって村の秩序を脅かす可能性がある脅威である。千里が村から帰ってきた後、千里自身の口から何があったか正しく語られていない。千里を「狐つき」と言つて魔に取り憑かれたと決め付けているのは村人である。よつて村人が、千里の失踪を、魔の仕業として「神隠し」だと判断していることになる。小松和彦によると、神隠しには「真相を直視する

ことをも隠してしまう<sup>(5)</sup>」という性質がある。千里の失踪事件は村にとって都合の悪い事柄を曖昧にするために「神隠し」とされたのではないだろうか。

それでは村人にとって都合の悪いものとは具体的に何か。小松和彦は神隠しについてさらに次のように述べている。

人を社会的な死、つまり「生」と「死」の中間的な状態に置くことであった。(中略) 神隠しとは、社会的な死の宣告であり、そこから戻ってくることは、社会的再生<sup>(6)</sup>であった。

このように神隠しに遭うことで死に近い存在になる。それに加えて母親が亡くなっている千里は元々「社会的な死」に近い存在だったのでないか。一般的に子供には両親がいる。その中で死別で母親がいない千里は、社会的に少し異質な存在だったのでないだろうか。その根拠として、失踪して帰って来ると叔父からひどい仕打ちを受けていることが挙げられる。愛されていたらすぐに心配されるのではないだろうか。

元々村にとって少し異質な存在だった千里が、虫に刺されたことでまるで魔に憑かれたような風貌になって村に戻ってきた。家に帰れないことよりも九ツ罾の女と別

れるのが悲しくて泣いてしまう程に、見た目だけでなく心も、村社会が嫌う魔の世界に向いてしまった。さらに叔父たちからひどい仕打ちを受けたことで、心がより魔の世界に傾いた。

そのように魔の世界に近づき、身も心も魔の世界に染まってしまった千里は、村にとって都合の悪い存在であり、お祓いをするなどして清めなくてはいけなくなつた。以上のことから、村人にとっての神隠しは、村の秩序を守るために都合の悪い事柄や存在を隠蔽する役割があると考えられる。

### 第三節 千里視点での神隠し

小松和彦は、神隠しに暗いイメージがあると述べた一方で「ひよつとしたら人間世界の苦しみから解放され、神の保護のもとで楽しい生活を送っているかもしれない」との思いもいづくのではなからうか」と述べている。このように、神隠しには、子供などが突然消えてしまう恐ろしいイメージの裏に、明るいイメージもある。実際に『龍潭譚』の千里は、神隠しに遭って行き着いた九ツ罅の女に安心感を抱いている。村に戻ってきた時に、九ツ罅が恋しくて泣いてしまう所からも、千里にとって九ツ

罅は恐ろしい所ではなく、反対に心を許せる場所であることが窺える。

また、幻想世界に迷い込むきっかけになつた禁忌は、好奇心旺盛な子供である千里にとっては犯しても当然と言えようなものである。また千里が禁忌を犯すことは、千里の自立や自我の確立に繋がっていると考えられる。まず、姉に黙って出かけてきたのは、言つて出かける山奥に行く事を咎められるからかもしれないし、保護者に言わないで出かけることであつた冒険気分を味わいたかつたのかもしれない。どちらにしても、誰にも邪魔をされないで自分の意思で遠くに行きたいという千里の自立心からの行動である。次に虫を殺す行為については、子供特有の弱いものへの加虐心や投げた石が当たらなくて悔しかつたため「色彩あり光澤ある蟲は毒なり」という姉の教えが頭をよぎつても虫を殺してしまつたのだと考えられる。続いて禁止されていた「かたゐ」と遊んだのは「其時は先にあまり淋しくて、友欲しき念の堪へがたかりし其心のまだ失せざると、恐しかりしあとの楽しきとに、われは拒まずして領きぬ」とあるように、迷子になつた心細さから友と遊ぶ楽しさを取つたからである。その後「極めて丈高き女」が現れてついて行

ったのも「うつくしき顔の笑をば含みたる、よき人と思ひたれば、怪しまで」とあるように千里の主観で判断している。このように千里は、社会の規律より自分の想いを優先させて、禁忌を犯し幻想世界に迷い込んでしまった。自分の意思を優先させた末にたどり着いた世界であるから、千里にとつて九つ罅は恐ろしい世界ではないはずだ。

#### 第四節 村視点の神隠しと千里視点の神隠しの違い

これまでの節で述べたとおり、村社会が考える神隠しと千里が考える神隠しとは違いがある。村人が考える神隠しは、村の秩序を守るために都合の悪いものを排除するための役割を持っていた。反対に千里は、自分の意思を優先させた結果、神隠しに遭い幻想世界に辿り着いた。このように神隠しや幻想世界の捉え方に違いがあるため、千里は神隠しから帰って来たとき、村人から思いもよらぬ待遇を受けて、戸惑った。しかし考え方の違いに気付くことで、自分の境遇を見つめ直すことになったのではないだろうか。千里は自分が思う正しい行動をしていて、姿形も自分では何も変わっていないことが分か

っているのに、村人から認識してもらえない。信じていた村人からひどい仕打ちに遭ったことで、村社会への疑惑が生まれ、自分が村の中で疎外されていたことに気付くことになったのではないか。

最初に村社会と千里との間に距離ができたのは、社で姉に千里本人であると気付いてもらえなかったときである。姉と顔を合わせる前に、千里は御手洗のよく澄んだ水で目を洗う。そうして本物の姉を見極めようと清めた目で、自分の顔は見るに忍びないものになっているが姉なら信じてくれると決死の思いで姉を見る。それなのに千里と認識してもらえなかった。この時千里は姉を信頼できなくなったのではないだろうか。

次に村社会と千里の距離が離れていったのは、村に戻ってきた千里に対しての村人たちのひどい対応が原因である。奈四郎という叔父は、千里に魔が取り憑いたと思ひ込み、水をかけたり泣き叫ぶ千里を柱に縛り付けたりとひどく扱う。その後千里は、虫に刺され彷徨い歩き体調が優れない体で質問責めにされ、村人の皆や普段仲良くしていた子供達からも魔が取り憑いた者と扱われる。慕っていた姉でさえ、千里を探し歩いてきた時と同じように、千里を千里だと信じてあげられず、魔がついた者

として叩く。千里自身は自分が狂っているのではないと分かっているのに、村の人々から信じてもらえない。叔父は戻ってきた千里を魔が取り憑いたと思ひ込んで魔を追い払おうをひどい仕打ちをする。また叔父の妻も、笑った千里を見て薄気味悪いと言ひ、千里を優しく迎えてはくれない。叔父夫婦のこの態度から、母を亡くした千里の後見人である叔父夫婦は普段から千里に心から愛情を注いでいるとは言ひ難い状態だったのではないだろうか。千里の母など本当に千里の事を心から信じている者なら、行方不明になつていた子供を心配してまずは優しく迎えるであらう。

ではなぜ千里は村の中で疎外されていたり、保護者である叔父夫婦からあまり愛情を注がれていなかったのか。それは、第二節でも述べたように千里が村の中で「社会的な死」に近い存在だったからだと考えられる。「母上みまかりたまひてよりこのかた三年を経つ」という状態の千里は、片親であるという点で異質である。また千里の年齢は、土に平仮名の「さ」や「く」を書いていゝことから、漢字を学ぶ前の幼い子供だと考えられる。幼い子供の母親の死という事実は、子供がかわいそうであるし、村人は残された子供の接し方を図りかねていたので

はないだろうか。そのため、心からの愛情が千里には注がれていなかった。

千里は神隠しから帰ってきた後村人が自分を信じてくれないかつたことから、村での自分の立場に気付いたのではないか。村人が千里を狐つきだと決めつけ、ひどい仕打ちをしたことで村人を信じられなくなつていった。特に信頼していた姉でさえも千里を狂つた者のように扱うため心を乱され、体にも異常が出るようになった。それが以下の状態である。

さてはいかにしてか、心の狂ひしにはあらずやとわれとわが身を危ぶむやう其毎になりまさりて、果てはまことにものくるはしくもなりもてゆくなる。

たとへば怪しき糸の十重二十重にわが身をまとふ心地しつ。しだい／＼に暗きなかに奥深くおちいりてゆく思あり。それをば刈拂ひ、遁出でむとするに其術なく、すること、なすこと、人見て必ず、眉を顰め、嘲り、笑ひ、卑め、罵り、はた悲み憂ひなどするにぞ、氣あがり、心激し、たゞじれにじれて、すべてのもの皆われをほらだたしむ。

この状態になつたのは、千里が村人など目に映るものを信じられなくなり、周りのもの全てに強く嫌悪感を抱く



ようになったためだと考えられる。そのため僧が誦する声も「耳を聳するばかり喧ましさ堪ふべからず」と通常よりうるさく聞こえるようになっていた。目に映る現実世界を嫌悪する代わりに「九ツ筈とをしへたる、たふとさうつくしきかのひとの許に遁げ去らむ」と心の中の九ツ筈の女に思いを馳せるようになった。千里の心は魔の世界に傾いていった。

しかし、千里は現実世界に戻って来ることができた。雷に驚いた千里が姉の膝に這い上がり抱きしめて、姉から抱き返してもらえたことで、「もの見る明かに、耳の鳴るがやみて、恐しき吹降りのなかに陀羅尼を呪する聖の聲々さわやかに聞きとられつ」のように千里の耳鳴りは回復する。また今まで姉が禁じていた「乳の下にわがつむり押し入れる」という行為によって「御佛の其をさなごを抱きたまへるも斯くこそと嬉しきに、おちゐて、心地すがくしく胸のうち安く平らになりぬ」とある。これは、恐ろしい思いをしている時に姉からの母性を感じさせる行為により安心感を得たことで、現実世界への信頼を取り戻し、現実世界に戻って来ることができたのであろう。

千里が現実世界に戻って来ることができたのは、今ま

で与えられていなかった母親からの愛情に代わる愛情を姉から与えられたからであるが、それだけが理由ではない。姉からだけではなく、九ツ筈という場からも力が与えられていたのだ。法師が拳をあげて千里の頭を打とうとしている時、雷が落ちる。また雨も激しく降っている。この天候は九ツ筈という場がもたらしたものではないだろうか。九ツ筈についている「九」の漢字の象形は「竜蛇の形。竜蛇に虫形と九形とあり、九は岐頭の形でおそらく雌竜<sup>8)</sup>」である。龍は「雲や雨を起こし、稲妻を放つという<sup>9)</sup>」とある。九ツ筈がもし竜に関係する土地なら、お経があげられているときの雨風と雷は、九ツ筈という場の仕業であると考えられる。雷が鳴っていることで、千里は姉を信じられなくなったことを一旦忘れて、雷の恐ろしさにより姉の膝に這い上がり姉を抱きしめた。また姉も千里が雷によって怯えていたために乳の下に頭を入れることを許したのではないだろうか。雨風や雷は、千里が現実世界に留まるために九ツ筈が与えた最後の試練である。そのため姉の抱擁により千里の胸のうちがおさまった後、雷の音が遠ざかったのは、雷を放つ役割を終えたため、千里が怖がる雷はおさめた。それに対し雨風は依然激しかったのは、雨は千里が恐れるものではな

いので降り続いたのではないか。また一夜の風雨により九ツ罾が淵になったのは、九ツ罾が役割を終えたからである。村社会と自然そのものから母親のような愛情を受けた千里は、海軍の少尉候補生という自立した大人になれたのだ。最後の場面の千里は二つの観点から、自立したと言える。一つは成長して進路を選び取り一人立ちしている点だ。もう一つは、水に関わる進路を選択している点だ。「うつくしき人の夢や驚かさむ」と言っていることから、千里は九ツ罾で過ごしたことや洪水で沈んだ九ツ罾を覚えていた。そのため、九ツ罾や当時の洪水に関連して、水に関わる職業に就いたと考えられる。

また、最後の場面だけ語り手が三人称になっていることも、千里の自立を示しているのではないか。今まで千里が体験した世界は、千里の一人称で語られているため千里の目線で見た世界であった。九ツ罾で見た幻想も千里が見たものである。客観的に見たら千里の体験した世界は全く別物に映るかもしれない。最後の場面が三人称になっているのは、千里の目線が村にいる他の大人と同じになり、客観的に事実を見られるようになったことを示しているのではないだろうか。千里だけが見ていた幻想は、千里が自立し大人になったことで消え去ったのだ。

千里は、決まりで作られた村社会から離れ、自分の意志を知ること、自分の欠けているものと自分が求めているものを知った。それは母に象徴される愛情であり、九ツ罾の女と姉から母親のような愛情を受けたことで、自立した大人になることが出来た。千里が遭った神隠しは、自分のいる世界から離れて自己に気づかせ、自立した大人になるために必要だったのだ。

それでは千里の心に安定をもたらし自立へと導いた母性とは、一体何か。「母性」とは「女性が母親として持つ性質。子どもを守り育てようとする母親の本質的な性質」とある。物語に登場する女性達から千里はどのような時に母性を感じたのか。千里に母性を感じさせた女性達は母親代わりになることが出来たのか。母親を亡くした千里が求めた母親像とは、どのようなものだったのか。二章では「母親」という存在についてより深く見ていく。

## 第二章 母親とは何か

### 第一節 千里が求める母親像

千里は九ツ罾の女に母性を見出した。九ツ罾の女のと  
のようなところに母性を見出したのか。主に四点あると

考える。一点目は女の容姿である。九ツ罾の女の容姿を千里が始めて見た印象は「見知りたる女にあらねど、うつくし顔の笑をば含みたる、よき人と思ひたれば」とある。九ツ罾にて再会した時は

ちかまさりせる面けだかく、眉あざやかに、瞳すゝしく、鼻や、高く、唇の紅なる、額つき頬のあたり薦たけたり。こは予てわがよしと思ひ詰たる雛のおもかげによく似たれば貴き人ぞと見き。年は姉上よりたけたまへり。知人にはあらざれど、はじめて逢ひし方とは思はず。

とあるように千里から見た九ツ罾の女は美しく優しく、千里は非常に好印象を抱いている。さらに、姉より年上でどこか懐かしく感じられるため、九ツ罾の女の容姿は千里が母性を見出す一つの要素と言えるだろう。

二点目は水と関係しているという点である。千里が九ツ罾で目を覚まして最初に見たのが、女が水浴びをしている姿であった。また九ツ罾という場所も水に関係している。九ツ罾は大沼を渡ったところにある。千里が九ツ罾に連れて行かれる前に気を失ったのが大沼の前で、村に戻ってくる時も大沼を女たちと一緒に船で渡ってきている。このようなことから千里は、九ツ罾の女に水のイ

メージを持っていると考えられる。千里が母親のお腹にいた頃の羊水のイメージと結びつき、「水」というモチーフからも九ツ罾の女から母親を連想したのではないだろうか。

三点目は、恐ろしい思いをしている時に守り、受け入れてくれたという点である。初めに「かたゐ」と隠れ遊びをしていて急に誰もいなくなってしまう不安な状態の千里に、女は優しく声をかけてくれた。また慕っていた姉に千里本人だと認識してもらえず腹立たしく泣いて走って倒れたところを看病してくれた。九ツ罾で女は優しい言葉をかけ、抱きしめていてくれた。姉に信じてもらえず、村に帰った後村人からひどい仕打ちを受けた千里にとって、ただ優しく受け入れてくれた九ツ罾の女は大きな安心感を与えてくれる存在であったであろう。本来母という存在は子供が失敗をしてもまずは子供の身を心配し、優しく包み込んでくれるのではないか。帰った後村人に温かく迎えてもらえなかった千里は、九ツ罾の女の優しい対応から母親のような愛情を感じたのではないだろうか。

四点目は「背に手をかけ引寄せて、玉の如き其乳房をふくませたまひぬ」という行為をした点である。「乳を

飲む」という行為は姉には許してもらえなかったものである。千里はそれをしてもらったことで、母親を思い描いた。またその後、千里は九ツ笹の女の胸に顔をつけて寝る。千里は眼を覚まし、眠った女の顔をあちこち触る。これは姉では成し得なかった触れ合いであり、母性を見出す行為だと考えられる。

これらの要素から母性を感じたり触れ合うことにより、千里は九ツ笹の女に死んだ母親の姿を重ねることになる。そのため母親の死んだ瞬間を思い浮かべ、女に刀が刺さり血が流れるという幻想を見たのである。死の幻想を見て、九ツ笹の女と死んだ母親の姿が千里の中で一致してしまったこの瞬間から、九ツ笹の女は千里にとって母親のような存在となり、千里は彼女を求めることになる。

千里は母に似ている容姿や以前母にしてもらった行為から九ツ笹の女に母性を感じている部分が多い。そのため千里は九ツ笹の女自身を見ているのではなく、九ツ笹の女の中に見える亡き母親像を求めているのだと考える。千里がこれまでに体験してきた母親らしい行為は死んだ母親にしてもらった行為だけである。このことから、千里が求めている母親像は亡くなった母親そのものだとと言える。

## 第二節 千里にとっての姉の存在

千里は迷っている最中にたびたび姉のことを思い出したり、普段から面倒を見てもらっている描写があることから、非常に姉を慕っていることが窺える。しかし「かゝるさまは、わが姉上とは太く違へり。乳をのまむといふを姉上は許したまはず」のように完全に母と同じというわけにはいかない。千里は九ツ笹の女に母性を感じるが、姉には感じない。その理由として九ツ笹の女と姉との違いが挙げられる。違いの一つは、年齢だ。姉は九ツ笹の女より年下で母のような年齢ではないため、母親像を投影し難いのだ。二つ目に、姉は九ツ笹がしていたようなスキンシップをしなかった。千里が九ツ笹の女に母親の姿を投影するきっかけになる「乳を口に含む」という行為を姉は許さなかった。この行動は女より年下である姉には体の発育も含め成し難い行為であり、もし可能だとしても姉は許さなかった。以上に述べた二点の理由から千里は姉に母性を感じなかったのだ。

姉は千里に「一人にては行くことなかれ」や「色彩あり光澤ある蟲は毒なり」と教えたり、魔に狙われないための教えを説いていて、社会の規律を守って生きるため

の指南役のように見える。また子供を遊びに出すときに帯の結び目を叩くと姉や母の魂が入って、魔が寄り付かなくなるといっておまじないを母親の代わりをしている。

このことから姉は母がいない千里の母親代わりを担っていたのではないかと考えられる。しかし千里は姉に母性を感じない。そこから愛情面ではなく教育的な面だけしか母親の代わりができていなかったのではないかと考えられる。姉は、千里が神隠しから帰った後顔を見て泣き、反対に千里が姉を安心させるために笑いかけていることや、千里を見て取り乱していることを考えると精神的に子供である。母親の代わりに教えることはできない。千里を本物の母親のように精神的に支えることはできない。千里が幻想世界に迷い込んだのは姉が母親代わりとして不十分なことが原因である。はじめに姉に黙って行き、姉がおまじないができなかったことで魔の世界に足を踏み入れてしまった。次に「いふことを肯か一人で来しを、弱りて泣きたりと知られむには、さもこそとて笑はれなむ。優しき人のなつかしけれど、顔をあはせて謂ひまけむは口惜しきに」と千里が思っていることから、姉に対して弱い所を見せたくないと意地を張っている。この強がりによって千里は急に家に帰ろうと

は思わなくなり、かたるに出会って更に魔の世界に迷い込むことになる。千里が神隠しに遭った後も千里を信じてあげられず、千里からの信頼を失い、千里がより魔の世界へ入り込む原因を作っている。

しかし、姉は母親が代わりとしては不十分であっても村人の中では千里から一番慕われている。その理由は千里の家族関係から窺える。千里は三年前に母親を亡くしていて父親もいないようである。そのため後見人は叔父夫婦になっている。他には召使いが何人かいて一緒に暮らしているようだ。千里が神隠しから帰ってきた時の乱暴な扱いから、叔父夫婦は日頃から千里をあまりよく思っていないことが窺える。また千里も叔父夫婦を信頼していないように見て取れる。このことから、村人の中では姉を一番慕うようになるのは当然であろう。また九ツ罈の女にしても姉にしても自分より年上の女性を、千里のように母を亡くした子供が慕うのは当然かもしれない。千里にとって一番身近で母と同じ女性である姉だからこそ村人の中で一番慕われているのだと考えられる。千里は村人の中で一番姉を信頼しているため、姉の反応によって感情が動き、現実世界に戻ってこれたり魔の世界に入り込んでしまったのではないか。千里に慕われ

ていて影響力を持つ姉は、千里を村社会に繋ぎ止めることができる存在である。

姉は母親代わりとして不十分だったが、最後の場面で愛情面でも母と同じ役割を担う事ができた。恐ろしい思いをしていた千里を抱きしめ、母親のような安心感を与えられたことで、愛情面でも母親の役割を果たすことができた。母性を感じることで現実世界の嫌悪感が払拭され、千里は現実世界に留まることができた。現実への信頼を取り戻したこの出来事のおかげでその後も村で生活を続け成長して海軍の少尉候補生となることができた。姉もこの時千里に母親のような振る舞いをしたことで精神的に成長した。そのため閑屋少将の夫人という成長した姿が登場するのだと考えられる。このように千里の姉は、千里が現実世界で自立して生きていくための母親役に成り得る存在である。

### 第三節 九ツ罅の女の正体

千里は九ツ罅の女に亡き母親の姿を重ねている。しかし、九ツ罅の女は千里の本当の母親ではない。千里の母親は三年前に亡くなっていて、亡くなった母が再び千里に会いに来たわけでもない。九ツ罅の女が千里の母親と

は別人であることを示す点がいくつかある。まず「この児を返さねばならぬから」と言っていることから、千里とは違うところに住む者であることが分かる。

以下の描写からも千里の母親ではないことが分かる。母上みまかりたまひてよりこのかた三年を経つ。乳の味は忘れざりしかど、いまふくめられたるはそれには似ざりき。垂玉の乳房たゞ淡雪の如く含むと舌にきえて觸る、ものなく、すゞしき唾のみぞあふれいでたる。

このように亡き母の乳の味とは違い、乳が出てこないことから、亡き母とは違う存在である。

また、千里自身も「九ツ罅とをしへたる、たふときうつくしきかのひとの許に通げ去らむ」と、女の下に「帰る」のではなく「逃げる」という表現をしていることから、別世界の人だと分かっているのではないだろうか。

以上の事から九ツ罅の女は千里の亡き母親ではない。それでは、九ツ罅の女の実態は何か。九ツ罅とは正確には「くるま山の山中、俗に九ツ罅といひたる谷」である。そこに住む女であることから、山中で生活している女であることが分かる。九ツ罅の女は一人で暮らしているようだが、彼女の元には、「顔の色いと赤き」老夫がよく

来ていて、助け合いながら生活している。

小松和彦は「山には山の民がいて、そこで完結した生活をしていた」<sup>11)</sup>と述べている。このことから、かつて平地の村人とは違う生活様式を持つ人々がいたことがわかる。九ツ笹の女と老夫は山で生活する山人だったのではないだろうか。山人とは「山に住む人。柚人・炭焼きなど、山で働く人。また、そのような服装をした人」<sup>12)</sup>であり、九ツ笹の女はこの意味で山人であったと解釈できる。また柳田国男の『山人考』に次のような記述がある。

そうして山人の特色とは何であったかというところには肌膚の色の赤いこと、二つには丈高く、ことに手足の長いことなどが、昔話の中に今も伝説せられ<sup>13)</sup>ます。

この山人の特徴は「極めて丈高き女」である九ツ笹の女の容姿と「顔の色いと赤き」老夫の容姿にあてはまっている。また「全体に深山の女たちは、妙に人に近づこうとする傾向があるように見える」<sup>14)</sup>という特徴から、千里を家に連れて来て看病しそのまま乳を含ませてなだめたり添い寝するといった女の妙に親しい行動も説明できる。以上のように山人の特徴と一致することから女と老夫は山で生活する山人だと考えられる。

九ツ笹の女を山女と仮定して彼女の行動を振り返る。

まず、境内で隠れ遊びをしていて「かたる」の子らが急になくなくなり呆然としている千里に声をかける。この時千里は「怪しまで、隠れたる児のありかを教ふるとさとりたれば」と、九ツ笹の女が隠れ遊び中の子供の居場所を教えてあげようと声をかけてくれたと思っているが、女がそう言ったわけではない。その後千里は女を見失ってしまうが、千里が見失つてからも女は近くにいて千里の様子を見ていたのだと考えられる。そして走って倒れた千里を見て九ツ笹にある自分の家に連れて帰った。姉と千里のやり取りも見ていたため、「あれでは姉様が見違へるのも無理はないのもの」と言った。斑猫という毒虫の仕業なのを知っていたのも、山の自然について詳しくて千里の症状を見て推測出来たからであろう。千里の家の場所を知っていたのは、「心たしかに覚えある、こ、よりはハヤ家に近し」とあるように千里は家の近くで迷っていたことから、九ツ笹の女にはどの辺りから来た子供なのか大体予想がついていたからではないだろうか。

千里は「こ、をわれに教へしを、今にして思へばかくれたる兒どももありかにあらで、何等か恐ろしきもの

われを捕へむとするを、こゝに潜め、助かるべしとて、導きしにはあらずやなど、はかなきことを考へぬ」とある。このように、九ツ笏の女は山に詳しい山女であるために、山に踏み入れてしまった千里に対して、山に潜む危険なものから避けてくれたのではないだろうか。

しかしそれでは説明がつけられない不思議な点が見られる。それは、途中から九ツ笏の女が千里の思い描いた幻想と重なっていくからだ。千里は九ツ笏の女が母親のような振る舞いをしてくれたことで、女に亡き母親を重ねる。その度に現実が曖昧になり幻想を見ることになる。まず千里が九ツ笏の女に母親を重ねるきっかけになった出来事は、乳房をふくませてくれたことだ。姉が許してくれなかったこの行為から、千里は亡くなった母親のことを考えぼんやりする。「軽く背をさすられて、われ現になる時、屋の棟、天井の上と覺し、凄まじき音してしばらくは鳴りも止まず」と現実に戻つてからも幻想のよくなものを見る。九ツ笏の女は鼠だと言うが「さりげなきも、われはなほ其響のうちにももの叫びたる聲せしが耳に残りてふるへたり」と幻を見たような気持ちになる。次に守刀を見せ「何が来てももう恐くはない、安心してお寝よ」と女が言ってくれ頼もしく思う。この時千里は

女の胸に顔をつけて眠り途中ふと目を覺まし、女を觀察する。「うつくしき人の胸は、もとの如く傍にあをむき居て、わが鼻は、いたづらにおのが膚にぬくまりたる、柔き蒲團に埋れて、をかし」というように母親の胸に抱かれていたような安心感を感じている。千里は心地良さそうだが、この時千里が見ている女は千里が思い描いた幻の姿だったのではないか。千里は女の顔に触れようとすることができない。これは、この場面の九ツ笏の女が幻であることを示している。目覺めた後「夢幻ともわかぬに、心をしづめ、眼をさだめて見たる、片手はわれに枕させたまひし元のまま柔かに力なげに蒲團のうへに垂れたまへり」と夢と現実の区別がつきにくくなっている。そしてその後、胸に剣をのせた九ツ笏の女が亡き母親のように見える。これは、胸に抱かれて寝るというまるで母親にしてみらうような行為をしてもらったことで、九ツ笏の女に亡き母親を完全に重ねてしまったことが原因だと考えられる。亡き母親の姿に見えるだけでなく、実際に女の胸に剣が刺さり血が流れたような幻想を見る。九ツ笏の女に亡き母親を重ねるあまり、頭の中で母親の死を再現してしまったのだ。

前述したように、九ツ笏の女に母性を感じてから幻想



を見ている。千里が求めている母親像は今は亡き実の母親である。このことから幻想を見るのは、九ツ罅の女に亡き母親を重ねることで現実世界から目を背け、亡き母親がいる死の世界に傾倒しているからではないだろうか。千里は神隠しに遭うことによって、実質的な母親がないために与えられる愛情が希薄であることに気付き、自分に愛情を与えてくれる母親のような存在を求めようになった。しかし千里は千里が求める母親のような存在を手に入れることができない。亡き母親を映し出した九ツ罅の女は千里の幻想が作り出したものである。そのため、求めても手に入れることはできない。それは亡き母親と同じで、千里は亡き母親を求めても既に亡くなっている人に会うことはできない。それでも亡き母親に執着し、「死」に縛られていたために、現実世界から遠のいてしまったのだ。千里が「死」にしがみついていたために、現在生きている村人と距離ができてしまった。また「生」の世界で生きている村人に疎外されたこともより深く「死」の世界にのめり込んでしまった要因である。千里を死の世界に近づけたのは母の幻だが、現実世界に引き戻したのも「母親」という概念だった。それでは、「母親」という存在は千里にとってどのようなものか。

次の節で考える。

#### 第四節 母親とは

第二章のこれまでの節で、千里が求める母親像と千里が慕っていた二人の女性について見てきた。どちらの女性も千里の完全な母親代わりとなることは出来なかった。姉は年齢などの理由で母親代わりとして不十分だった。千里は九ツ罅の女に母親を投影していたが、亡き母親を投影した九ツ罅の女の姿は幻で、本当の九ツ罅の女は千里とは別の場所で生活している山女だった。そもそも千里が求めていた母親は、亡き母親だけだったために、誰も完全な母親代わりになることはできなかったのだ。そのため、亡き母親がいる幻想の「死の世界」に囚われてしまう。

しかし千里は最終的に現実世界に留まって生き続け、自立することが出来る。それは姉と九ツ罅から愛情を受け、肯定してもらえたからだ。姉は元々千里と村社会と結びつける役割を持つ存在だったため、最後の場面で姉が千里の存在全てを肯定したことで、村社会に留まることが出来た。しかし社会的死の状態にあった千里が現実で成長していくためには、それだけでは足りずもっと大

きなものから肯定される必要があった。その役割を果たしたのが、九ツ筈という場である。千里は村社会と九ツ筈から愛情を受け、肯定してもらえたことで、母親の死を乗り越え、現実世界の中で新しい居場所を自力で掴み取ることが出来た。母親とは、子供に愛情を与え、子供の存在を肯定するために必要なものの象徴なのである。

## 終章

千里は幼くして母親を亡くし、神隠しに遭った中で出会った女に亡くなった母親を投影した。作者の鏡花は子どもの頃に母親を亡くし、小説に母親のような美しい女性を描いている。鏡花が幻想世界の中に亡き母親の姿を描いたのは超自然的なものを信じていたからではないだろうか。鏡花は「おぼけずきのいわれ少々と処女作」で次のように述べている。

僕は明かに世に二つの大なる超自然力のあることを信ずる。これを強いて一纏めに名すると、一を観音力、他を鬼神力とでも呼ぼうか、共に人間はこれに對して到底不可抗力のものである。<sup>(15)</sup>

鏡花にとつての母親は、既に亡くなっているために、触れられないものである。そのため、同じく触れられな

いものである幻想世界の中に母親の面影を描いた。そして鏡花は、超自然的なものを信じていたからこそ、母親がどこかにいると信じ、小説の中で母親の姿を求めたのではないか。

このように、亡くなってからも精神的に母親を求め続けるのは、「母親」という存在に意味があるからだ。そのように重要な意味を持つ母親がいない子供はどうすればいいのか。母親を亡くした千里が自立できた理由から考えると、一つ目に「母性的な愛」が与えられることが必要である。母親という女性を求めた千里は、姉から子供を守ろうとする女性的な愛情を受けたことにより、現実世界で生き続けることが出来た。

二つ目に、千里の場合は社会的な死の状態にあったため、社会全体から肯定され安心感を持つことが必要であった。母親や子育てについて、現代的な観点から柏木恵子が次のように述べている。

人間は産まれてきた子を放置したりしません。必ずといってよいほど育てます。なぜなのでしょうか？幼弱なものに対して、可愛いと思う、赤ちゃんの小ささや可愛さに惹き付けられる、そして何か力になってやりたいと思う共感的な心情を人間が備えてい

るからです。これは子どもを産んだ女性だけがもつ本能ではありません。男性も女性もまた血縁の有無にかかわらず、誰もがもっている心と力です。「養護性」といいます。これは、ヒトに高度に発達した

大脳がもたらしたものの、進化の産物です。<sup>(16)</sup>

母親がいらない子供には、本来全ての人に備わっているこの「養護性」が向けられることが必要なのではないか。村社会の規則や千里の思い込みのため、千里はあまり愛情が与えられていることを実感できなかった。その後母親のような振る舞いをしてくれる九ツ罇の女に出会って、彼女に「母親」を求める。しかし千里が求める母親は、亡き母親であるため、手に入れることはできない。しかし、その代わりに千里を満たし、千里が現実で生き続け大人になるために必要としたのが、女性的な愛情である「母性」や、「養護性」のようなあらゆる人が子供を守ろうとする性質なのではないだろうか。

千里にとって、姉も九ツ罇の女も完全な母親になることはできなかつたが、最後の場面では姉と九ツ罇の両方から愛情を受けた事で満たされ、成長することが出来た。人が自立するには、複数の肯定してくれる人物が必要だったからではないだろうか。

このように多様な人が子育てをしています。共通しているのは子育てをしているのが一人ではないこと、つまり複数教育であることです。人類の子育ては、他の動物に類がないほど長期にわたり、そしてさまざまなことを教え育てる必要があります。これをやり遂げるのは一人では絶対不可能で複数の人の手と心が必要です。複数の心と手によって育児はつづがなく行われてきたのです。<sup>(17)</sup>

このように、人が育つためには複数の力が必要であった。親を亡くし母親からの愛情が欠けていた千里に必要なものは、たくさんの人または世界というような大きなものから愛情を受け、肯定されることだった。村から疎外されたように感じた千里が、複数のものから受け入れられたことで、自分が受けるべき愛情に気づき、現実世界で生き続け自立することが出来た。「龍潭譚」という物語は、千里の成長譚であり、自我形成し、成長するためには、存在自体を肯定してくれる「母親」のような存在が必要だということを示しているのである。

注

(1) 『国民之友』小説六佳撰 八面樓主人(一八九六年、

民友社)

- (2) 『日本国語大辞典 第二版 第三卷』「神隠し」(二〇〇一年、小学館)
- (3) 注二に同じ「かたる」
- (4) 小松和彦『神隠し―異界からのいざない』(一九九一年、弘文堂)
- (5) 注四に同じ
- (6) 注四に同じ
- (7) 注四に同じ
- (8) 白川静『字通』「九」(一九九六年、平凡社)
- (9) 『日本国語大辞典 第二版 第十三卷』「龍」(二〇〇二年、小学館)
- (10) 『日本国語大辞典 第二版 第十二卷』「母性」(二〇〇一年、小学館)
- (11) 小松和彦『天人の探検 妖怪』(二〇一五年、有楽出版社)
- (12) 注九に同じ「山人」
- (13) 柳田国男『遠野物語・山の人生』(一九七六年、岩波書店)
- (14) 注一三に同じ
- (15) 『新潮』第六卷 第五号(一九二二年、新潮社)
- (16) 柏木恵子『親と子の愛情と戦略』(二〇一一年、講談社)
- (17) 注一六に同じ

※本文引用の際、適宜旧字を新字に改めた。

泉鏡花『龍潭譚』の引用は全て『鏡花全集 卷三』(泉鏡太郎、一九四一年、岩波書店)による。

(平成二十九年年度本学卒業生)